

Jane Eyre におけるカルヴァン主義の経済倫理 ——St John はなぜ Jane に求婚したのか——

川 北 天 華

はじめに

Charlotte Brontë 作『ジェーン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)において、Thornfield を逃げ出した Jane を保護することになるのが、敬虔な牧師 St John とその妹たちだ。“All men must die”(386)という台詞と共に登場するこのストイックな牧師は、作品後半において Jane の人生に大きく寄与することになる。しかしながら、『ジェーン・エア』批評において St John 個人が注目されることは少なく、彼を主題に扱ったわずかな批評家の一人 Elizabeth Imlay でさえ、彼を「記憶に値しない(unmemorable)」キャラクターだと述べている(Imlay 204)。Rochester との比較の対象として俎上に載せられることこそあれ、St John 個人の思想や感情についての議論は、これまで後手に回ってきたと言わざるを得ない。

しかし St John は、分量的には 8 章分にもわたり¹⁾ Jane と共に過ごし、後に親戚として財産を分け合い、最終的には彼女に求婚までする人物である。さらに結末では、Jane の結婚と並べられるように、St John のインドでの殉教が暗示される。『ジェーン・エア』の最終章は、Jane の語りではなく、“Amen; even so come, Lord Jesus!” (521)という St John の台詞で閉じられるのである。このように、作品後半において St John の果たす役割は決して小さいとは言えず、改めて彼に注目することには意義があると考ええる。

本稿では、St John を主題として取り上げるにあたり、彼が敬虔なクリスチャンであること、特にプロテスタントのカルヴァン主義者であることに着目する。作者 Charlotte の父 Patrick Brontë が St John と同じ牧師という職業であり、同じ名の大学²⁾を出ていることを鑑みても、St John と宗教とは切り離せないからだ。

複雑な宗教的環境³⁾で育った Brontë 姉妹は、作品の中で、しばしば聖職者や信心深い人物に対し冷笑的な態度を見せている。Emily Brontë の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)の Joseph はその典型例で、極端に聖書中心的な考えを持つ人物として滑稽に描かれる。『ジェーン・エア』においても、Lowood 校の監督の牧師 Brocklehurst 氏は、教義を盾に自分の圧政を正当化し、Jane ら生徒たちに非人道的な指導をしている。しかし、聖職者だからといって、St John を彼らの同類と見なすのは適切ではない。主人公との距離が圧倒的に近いからだ。Jane への求婚を抜きにして、St John を語ることはできないだろう。

本稿では、見落とされがちなもう一つの求婚——St John の求婚——とそこに至る

までの彼の心理を分析し、St John を、Charlotte の宗教観が現れたキャラクターとして再評価したい。そのため、ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーによる『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を援用して、プロテスタントの職業観やカルヴァン主義の経済倫理が St John の行動にどのように影響しているかを考察する。さらに、St John の Jane への求婚が、実は経済的な理由によるものであることを示し、彼がカルヴァン主義の歪みを体現した存在であることを明らかにする。

1. St John Rivers

宣教師になるという夢を心に、Morton 教会で牧師をしている St John は、先ごろ父を亡くし、家庭教師として働く妹たちと共に数週間、生家の Moor House に滞在していた。そんな折、突然現れたのが、正体不明の行き倒れの女性 Jane だった。St John は使用人に追い返されそうになっていた Jane を招き入れ、看病をし、仕事を都合してやる。後にいとこだということが判明する彼は、Jane にとって兄のような存在である。

贅沢・放埒・墮落などのイメージが強い Rochester とコントラストを成すように、St John は清貧・真摯・克己といった雰囲気さを常にまとっている。あまり見目の良くない Rochester に比べ、St John はギリシャ型の美貌を備えている点でも対照的だ。

しかし、St John は高潔でこそあれ、温かさや柔軟さには欠ける人物である。職務に忠実であるがあまり、どんなに悪天候でも区民の元へ出かけてゆき、家にも勉強に励むばかりで、妹たちと楽しく語らうことはない。彼にとっては宣教師になって伝道の日々を送ることこそが理想であり、Morton での牧師職も枷でしかないのである。

St John の氷のように厳しい精神は、Jane には相容れがたい。そのため、宣教師の妻としてインドに同行することを求められた Jane は、激しく苦悩することになる。それでも St John の威容に押され、今にも結婚を承諾しそうになった瞬間、どこからともなく Rochester の呼び声を耳にし、Jane は Moor House を飛び出して Rochester の元に戻る。Jane を失った St John は、その信念を最後まで曲げることなく、結局一人で赴いたインドで殉教することが暗示されて物語が閉じられる。

本稿で解明したいのは、St John の求婚の動機である。なぜなら、St John はそもそも Jane に恋愛感情を持っていないからだ。St John が愛しているのは Jane ではなく Rosamond Oliver——町の有力者の令嬢で、少々軽はずみなどころはあるが、その名の通り薔薇のように美しい娘——である。St John は以前から Rosamond に好意を寄せており、彼女の話題になるときだけは、普段は押し隠している感情をあらわにする。

[N]ow I[St John] see myself stretched on an ottoman in the drawing-room at Vale Hall

at my bride Rosamond Oliver's feet: she is talking to me with her sweet voice—gazing down on me with those eyes your[Jane's] skillful hand has copied so well—smiling at me with these coral lips. She is mine—I am hers—this present life and passing world suffice to me. (430)

Rosamond への想いを吐露する St John は情欲的で、Rochester にも似た独占欲すら見せている。牧師以前に一人の青年である St John の姿がうかがわれる場面だといえよう。単純に「敬虔で頭の固い牧師」と捉えられがちな St John だが、それは彼の一面にすぎず、このように時折人間味を滲ませていることが分かる。

Jane によれば、Rosamond の側も St John を尊敬しており、結婚もまんざらではなさそうなのだが、St John は積極的な行動に出ない。Rosamond は魅力的な女性だが、宣教師の妻としてはふさわしくないと考えるからだ。

‘It is strange,’ pursued he[St John], ‘that while I love Rosamond Oliver so wildly—with all the intensity, indeed, of a first passion, the object of which is exquisitely beautiful, graceful, and fascinating—I experience at the same time a calm, unwarped consciousness that she would not make me a good wife; that she is not the partner suited to me[...].’ (431)

St John にとって、宣教師になることは最大の責務であり、Rosamond への熱烈な愛もこれには及ばない。そして、彼が二の足を踏んでいるうちに、Rosamond は別の財産ある男性と結婚してしまう。St John は「戦いは戦われ、勝利は勝ち得られたのですね(You see, Jane, the battle is fought and the victory won.)」(457)と語るが、意志を貫く強さというよりは、愛を失った痛々しさが目立つ。

一方、St John が Jane に恋愛感情を持っていないことは明らかである。ロマン主義の色濃いこの作品において、St John のプロポーズほど愛からかけ離れた場面はない。

‘...We must be married—I[St John] repeat it: there is no other way; and undoubtedly enough of love would follow upon marriage to render the union right even in your eyes.’

‘I[Jane] scorn your idea of love.’ (471 以下全て下線部は筆者による)

St John は Jane との結婚を義務のように語る。「愛は結婚後に生まれてくる」という以上、現在は Jane に対して愛を持っていないことは明白だ。愛のない結婚など考えられず、妹としてならば同行すると言う Jane に対し、St John は結婚による結びつきを強調し、あくまでも妻になることを彼女に強いる。

一般に、St John は愛よりも宣教師としての使命を取ったと理解される。しかし仮にそうだとすればいいよ、彼が Jane と結婚する必要などないのである。St John は Jane に会える前から宣教師を志望しており、唯一の障害であった父が亡くなった後は、受け持ちの教区の後任牧師の到着を待つだけだと述べている。すなわち、彼はもともと一人でインドへ向かうつもりだったはずだ。それなのに、なぜ Jane にこれほどまでに同行を求めるのだろうか。愛でないなら一体何が、「結婚しなければならない」と言うほどに彼を駆り立てるのか。

求婚に至るまでの出来事を時系列順に整理すると、Jane が親戚であったことが判明する(444)、Rosamond 結婚の知らせが入る(456)、St John が Jane に求婚する(464)という流れになる。しかし、St John は決して Rosamond に失恋したから Jane に乗り換えたわけではない。むしろ、Rosamond の結婚の知らせを受ける前に、既に Jane との結婚を意識し始めているかのような描写があることに注目したい。

‘Jane, I will be your brother—my sisters will be your sisters—without stipulating for this sacrifice of your rights.’

‘Brother? Yes; at the distance of thousand leagues! Sisters? Yes; slaving amongst strangers! I, wealthy—gorged with gold I never earned and do not merit! You, penniless! Famous equality and fraternization! Close union! Intimate attachment!’

‘But, Jane, your aspirations after family ties and domestic happiness may be realized otherwise than by the means you contemplate: you may marry.’

‘Nonsense, again! Marry! I don’t want to marry, and never shall marry.’ (447)

St John は Jane に自分たち兄妹が彼女のいどこにあたること、Jane には叔父の遺産を相続する権利があることを告げる。突然のことに混乱している Jane に対し、St John は唐突に結婚の可能性をほのめかすのである。結婚の相手こそ示さないが、St John はこの時点ですでに Jane との結婚を考え始めているのではないか。

重要なのは、これが「Jane に莫大な財産が転がり込んだ」ことを知らせる場面だということだ。St John が Jane に恋愛感情を持っていないのだとすれば、これこそが彼にとっての結婚の決め手だったといえるのではないだろうか。つまり、St John が Jane に求婚したのは、Jane が金持ちになったからである。

華やかな生活とは距離を置き、清貧を地で行く St John が、経済的な理由で Jane に求婚したということ、一見奇妙に思える。もちろん St John が金の亡者だというわけではない。むしろ彼にとっては、Jane の得た財産は、贅沢や墮落とは正反対のものと繋がっていると思われるのである。

ここで確認しておかなければならないのは、St John は牧師、それもプロテスタン

トのカルヴァン主義者だということだ。16世紀、ルターにやや遅れて、スイスで宗教改革を展開したジャン・カルヴァンらの神学を基礎に置くカルヴァン主義は、聖書のみを唯一絶対の指針とし、次章で詳しく述べる「予定説」の立場をとることで知られる。謹厳実直、禁欲的というイメージが強いのも特徴である。

Janeによれば、St Johnの説教には「カルヴァン派の教義——神の選抜、予定説、定罪——などに対する辛辣な暗示(stern allusions to Calvinistic doctrines—election, predestination, reprobation)」(450)が満ちており、Rosamondへの恋心も「キリスト教徒としての禁欲主義(his Cristian stoicism)」(424)で抑えつけられている。常に自分に厳しく、質素な生活を送りながら牧師職に全精力を注ぐ彼は、まさにカルヴァン主義の申し子である。そしてこれこそが、St JohnのJaneへの求婚を説明付けるヒントになると考える。

カルヴァン主義者であるSt Johnにとって、財産と信仰とはどのように繋がっているのか。その手掛かりとして、次章ではマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を参照する。

2. カルヴァン主義者としての St John

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(*Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus* 1904-05)は、ドイツの社会学者・経済学者マックス・ヴェーバーによる論文である。ヴェーバーはこの論文で、禁欲を旨とするプロテスタントこそが営利的資本主義の発展に貢献したという逆説的な論を展開した。以下、要旨を簡単にまとめる。

一般に、カトリックよりもプロテスタントの方が信仰に篤く戒律が厳格で、世俗的営利に疎いとされている。しかし実際には、近代的中産階級を育成し資本主義を促進する役目を担ってきたのは、プロテスタントの信仰であった。特に、プロテスタントの中でも禁欲的で、営利の追求を強硬に否定したはずのカルヴァン主義こそが、資本主義の誕生に大きく貢献したのだと、ヴェーバーは論じている。

カルヴァン主義の「予定説」では、全知全能の神は、最初の人間アダムを含めて、あらかじめすべての人間を、ある者は救いに、ある者は滅びに予定したとされる。つまり、人が天国に行くか地獄に行くかは、その人の意志や行動には無関係で、すべては一方的に神が決定する。

この教理は、神がこの世に定めた職業生活に励み、かつ禁欲的な生活を送ることが、救いに選ばれた者の確かなしるしだとする考えを導いた。すなわち、人々は、「自分が神によって救われている人間ならば、神の御心にかなう行動をするはずだ」と考え、贅沢を禁じ勤勉と労働に勤めたのである。彼らは世俗の職業を神から与えられた使命「天職」⁴⁾と捉え、救いの確証を得るために職業労働に励んだ。

救いの確証は、日々新たに、労働とその成果を通して確認されなければならない。

その確認の基準となるのが、労働の収益性である。職業に従事し、心身の能力を生かして労働することは、良いものを安く提供することであり、結果としてより多くの利益を得ることになる。すなわち、神に選ばれた者は天職に励み、その結果、経済的繁栄を得て豊かになるのである。

しかし、この富はあくまで神から委託された「神のための富」であり、神の栄光のために合理的に管理運用しなければならない。カルヴァン主義は獲得した利得を享楽によって消費することを禁じているから、労働によって得た財産は、次は生産的な投機に向けられることになる。こうして、禁欲的なカルヴァン主義の要請から資本主義の絶えざる利潤追求へ、という逆説的な連関が成立するのである。

ヴェーバーの論を繰り返すと、カルヴァン主義者たちは「天職を信じ」「労働を貴び」「神のための富裕を肯定する」。以上を踏まえ、カルヴァン主義者としての St John の思考を追っていきたい。

まず St John の「天職」意識について考える。言うまでもなく、St John は、宣教師こそが自分の天職なのだと考えており、作中何度もそのような発言をしている。

‘But you[St John]need not be a missionary. You might relinquish that scheme.’
‘Relinquish! What! my vocation? My great work? My foundation laid on earth for a mansion in heaven? [...] It is what I have to look forward to, and to live for.’
(431)

St John は宣教師の仕事をはっきりと「召命(vocation)」と言い切る。Jane がどんなに説得しても St John の決意が揺らがないのは、彼がこの仕事を神から与えられたものだと信じているからだ。

‘[...]After a season of darkness and struggling, light broke and relief fell: [...] my powers heard a call from Heaven to rise, [...] God had an errand for me; to bear which afar, to deliver it well, skill and strength, courage and eloquence, the best qualifications of soldier, statesman, and orator, were all needed: for there all centre in the good missionary. A missionary I resolved to be. [...]’ (417)

一度は牧師という変化のない職に辟易する St John だが、あるとき天の声を聞き、宣教師になることを決意したという。絶えず変化を求める気質は Jane と St John の共通点だが、St John の場合、「自分は選ばれた」というカルヴァン主義的な矜持が根底にあり、それゆえ宣教師という職業に強い執着を抱いていると考えられる。だからこそ、種々の事情でなかなか宣教の旅に出発できないことに苛立ちを覚えているのだ。

次に、St John の「労働」に対する意識について分析する。St John 本人が牧師としての労働に身を捧げていることは明らかである。彼はしばしば過剰なまでに労働に徹し、そのことに喜びを感じる。あまりに天気の良い日など、妹たちは外出を見合わせるよう勧めるのだが、彼は「快活というよりも厳粛な、独特な微笑(a peculiar smile, more solemn than cheerful)」(404)を浮かべて出かけてゆき、帰って来たときには「出かけたときより幸せそう ([H]e looked happier than when he set out.)」(455)といった様子で、疲れや飢えより義務を遂行したことを喜ぶのである。

また、St John は自分だけでなく他人に対しても、神のための職業労働を貴ぶカルヴァン主義の精神を押し付けがちである。Jane は財産を得たことで働く必要はなくなるのだが、それでも週一度 Morton の学校で教えることを約束すると、St John は満足そうな様子を見せる。天候が悪い日に妹たちが Jane の学校行きを止めても、St John は「Jane は君たちが思っているような弱虫じゃないよ(Jane is not such a weakling as you would make her)」(458)と言って、Jane にも自分と同じく、あくまでも職務を遂行するよう勧めるのである。

一方 Jane にしてみれば、学校へ行き続けるのは単純に生徒たちへの愛着によるものであって、労働そのものが目的ではない。Jane は St John とは異なり、働かなくても生きて行けるだけの財産を得たならば、とりたてて勤労に励む義務はないと考えているのだ。Jane がこれまで必死に働いてきたのは、あくまでも生きるためであって、莫大な遺産を手にしてからは、物語の結末に至るまで、彼女が手に職をつけた描写はない。このように、Jane と St John との間には、労働に関する意欲のズレがあることが分かる。

しかし St John はそのズレに最後まで気づかない。

‘God and nature intended you[Jane] for a missionary’s wife. It is not personal, but mental endowments they have given you: you are formed for labour, not for love. A missionary’s wife you must—shall be. You shall be mine: I claim you—not for my pleasure, but for my Sovereign’s service.’ (464)

プロポーズの言葉で Jane を「労働のために形づくられた」と形容していることから、St John があくまで彼女を「よく働く娘」として評価していることが分かる。Jane が村の学校での仕事を要領よくこなしたことは、彼の「試験(sundry test)」(465)に彼女が合格したというしるしだったのである。

しかし、Jane が「よく働く」ことが求婚の決め手とはいえない。重要なのは、Jane が「よく働く」上に「財産を得た」ことである。

St John はふとしたきっかけで Jane の本名を知り、自分たち兄妹と血の繋がった親戚であることをつきとめる。その上、彼女が叔父から多額の遺産を相続したことも

発覚する。

愛すべき兄と二人の妹を得たことが分かったとき、Jane は、「これこそ真実の富——心の富！(This was wealth indeed!—wealth to the heart!）」(444)と喜ぶ。Jane は自分が資産を得たという知らせよりもむしろ、St John たちと血が繋がっていると分かったことが嬉しいようだ。つまり Jane にとっての“wealth”とは、金銭ではなく、自分を愛してくれ、尊敬に値する家族のことなのである。

しかし、これに対し、St John は以下のように反応する。

St John smiled. ‘Did I not say you neglected essential points to pursue trifles?’ he asked. ‘You were serious when I told you you had got a fortune; and now, for a matter of no moment, you are excited.’

‘What can you mean? It may be of no moment to you; you have sisters and don’t care for a cousin; but I had nobody; and now three relations [...]. I say again, I am glad!’ (444-45)

ここで St John は Jane に対し、「金持ちになったと知らせたときには真面目くさった顔になり、そして今は、とるにたらぬこと(血の繋がりを知らされたこと)にはしゃぎたてる」と言う。つまり彼は「金持ちになったことをもっと喜ぶべきだ」と考えているのである。St John は常日頃から贅沢をせず質素な暮らしを旨とし、Jane にも同じような生活をさせていたが、それならば Jane の継いだ遺産こそ「とるにたらぬこと」ではないか？

一見不自然にも思える St John の反応だが、前述のカルヴァン主義の経済倫理に照らせば説明できる。つまり St John は Jane が継いだ遺産を、ヴェーバーが言うところの「神のための富」だと考えたのではないだろうか。というのも、彼はこの遺産について、以下のような発言をしている。

‘[...] [T]he entire fortune is your[Jane’s] right: my uncle gained it by his own efforts; he was free to leave it to whom he would: he left to you. After all, justice permits you to keep it [...].’ (446)

St John によれば、叔父の遺産は叔父が努力して働いた結果得られたものであり、彼がそれを Jane に残したのなら、Jane がそれを受け取って金持ちになるのは正当なことである。そして Jane が正当な権利として富を得るのであれば、それはカルヴァン主義が信じる「神の御心にかなう者」の証だといえる。だからこそ、彼にとって Jane が大金を得たことは、血の繋がりに以上に喜ばしいことなのだ。

「家族よりも金銭の方が価値が高い」ともとれる発言は、一見 St John らしくない

とも思えるが、ヴェーバーの論を借りると、彼がそれだけ Jane を評価していると解釈することができるのである。

おわりに

以上のように、カルヴァン主義の経済倫理に照らして考えると、St John の Jane への求婚の裏には、経済的な要因があったといつてよいだろう。

St John は Jane を「選ばれた者(the chosen)」(477)だと考えた。彼がそう確信するのは、Jane が大金を手に入れ、それによって「神の御心にかなう者」だということが証明されたからである。したがって、遺産の話がなかったならば求婚という展開になったかどうかは分からない。元々一人でインドに行くつもりだった(そして実際そうすることになる)St John が、Jane との結婚を義務とすら考えるのは、「選ばれた者」Jane をそばに置くことで、彼自身の救いの確証を高めるためだったのかもしれない。そして、その求婚が結局受け入れられず、彼が志半ばにして命を落としてしまうことは、Charlotte のカルヴァン主義への強い批判とも読めるのではないか。

実際、Charlotte はカルヴァン主義をはっきりと拒絶していたという(Thormälén 16)。しかし、彼女は単にカルヴァン主義を嫌うだけでなく、カルヴァン主義者たちを实によく観察し、その思想を理解していたといえる。その証拠に、ヴェーバーが論じる 50 年以上も前に、Charlotte は既に、禁欲的なカルヴァン主義が実は富を肯定していることを見抜き、小説に生かした。すなわち、Charlotte は、St John を風刺的に描くことによって、カルヴァン主義の歪みを告発しているのである。

しかし同時に、Charlotte のこの鋭い観察眼が、St John にリアリティを与えていることも指摘しておきたい。Joseph や Brocklehurst 氏が共に平面的なキャラクターであり、現実にいるとは思えないほど戯画化されているのに対し、St John の言動は教義に照らせば十分理解可能で現実的である。その上、教義に拘り定規に従うがゆえに一人で突っ走ったり、敬虔さの裏に情欲や選民意識を隠していたりと、彼には単なる「厳格な牧師」に留まらない人間味のようなものが感じられるのである。つまり、St John の歪んだ宗教観をつぶさに描写することは、逆に、彼に人間的な厚みを与えることにもなったのではないだろうか。その根幹に Charlotte のカルヴァン主義への批判があるとしても、St John は一人の人間としてやはり興味深く、分析の価値のある存在なのである。

註

- 1) 章の数に換算すれば、Jane が幼少期に Gateshead で過ごした日々の実に 2 倍の長さである。一方年数では、Gateshead で過ごしたのは 10 年間であるのに対し、Moor House では 10 か月にすぎない。Moor House での日々は、Jane にとってそれほど比重が大きかったといえる。
- 2) Patrick Brontë は、Cambridge 大学の St John's college を卒業している。同じ大学にいた実在の宣教師 Henry Martyn と St John との類似は既に指摘されている (Thormählen 215)。
- 3) Brontë 姉妹の父 Patrick はアイルランドのプロテスタントの家出身で、メソジスト主義と福音主義から大きく影響を受けている。一方伯母の Elizabeth Branwell は厳格なメソジスト派だった。(廣野 51)
- 4) 「職業」を表すドイツ語の Beruf(英語の calling にあたる)という語は、「呼ぶ」という意味の rufen という語に由来し、もともとは「神から呼び召されて与えられた使命(召命)」という意味を持っている(ヴェーバー 68)

参考文献

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*, edited by Stevie Davies, Penguin, 2006.
- Gren, Heather. *Charlotte Brontë: The Imagination in History*, Oxford UP, 2004.
- Imlay, Elizabeth. *Charlotte Brontë and the Mysteries of Love: Myth and a Allegory in Jane Eyre*, Harvester Wheatsheaf, 1989.
- Thormählen, Marriane. *The Brontë and Religion*, Cambridge UP, 1999.
- ヴェーバー、マックス『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄
訳、岩波書店、1988 年.
- 梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム 神と富との間』新教出版社、2010 年.
- 廣野由美子『謎解き「嵐が丘」』松籟社、2015 年.

The Economic Ethics of Calvinism in *Jane Eyre*: Why Does St John Ask Jane to Marry Him?

KAWAKITA Yuki

Summary: St John is a young, stoic pastor in Charlotte Brontë's *Jane Eyre* (1847). Thus far, little attention has been paid to him and his proposal to Jane. In this paper, we argue that St John's view of marriage and wealth comes from his Calvinist philosophies; to do so, we refer to Max Weber's book of economic sociology, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* (1904-05). According to Weber, Calvinists consider their labor as a vocation, and approve of wealth as the result of working hard for God. Applying this logic to St. John, a typical Calvinist, it can be said that his proposal is based on Jane's wealth, rather than his love for her. In conclusion, St. John is a character who represents Charlotte's dislike for Calvinism.